

「平和を戦う」：いかにプロパガンダが米人の中で現実を歪めたか

——ロシア旅行によってわかってきたこと

<https://www.rt.com/russia/577345-russophobia-reality-us-ritter/>

RT/ Scott Ritter

Jun 2, 2023



この国を1か月かけて旅行して目を開かれた私の体験と、帰国後に体験した敵意について

4月の終わりに、娘のビクトリアと私は、ニューヨークのJFK空港を出発し、終着地シベリアのノボシビルスク市に到着し、26日間をかけ、ロシアの12都市を回る初めての旅行をした。

公的な目的は商用だったが（私は著書の「軍備縮小競争」 *Disarmament Race* を推進中であり、これはロシア語によって、Komsomolskaya Pravda 出版社から出版されている）、非公式の、そして私にとって最も重要な、訪問の目的は、今日のロシアをよりよく理解する機会を得ることだった。そのために私はロシアの歴史を深く掘り下げ、その文化をよりよく把握し、その過程で「ロシアの魂」を可能な限り、正確に理解しようとしていた。

私の観点からは、両方の目的共、達成された。この出版社は、その諸々の成果に満足していると私は思っている。そこには、有効なメディアを取材した旅行があり、活発な質疑応答を含む、出席者の多いタウンホール式のイベントがあり、わずか数日で第1刷が売り切

れたといわれる成果があった。あらゆる職業や階層のロシア人との、かなりの交流を通じて、2023年前後の現代ロシア国家を構成するものの複雑さを、より深く知った後で、私は帰国の途に就いた。しかし、ロシアの魂を明瞭に言い当てることは、それが可能としても、沢山のデータと経験についての、より深い考察を要求する。それはこの数日間の旅行で得られるようなものでなく、この論文の範囲を超えている。

私はこの冒険を終えた今、ロシア嫌い（憎悪）として知られる、アメリカの情報パンデミックの存在を十分に承知している。また、このアメリカ人の心の病気を、事実に基づいて変えようとするれば、私のロシア体験に生ずる困難があるだろうとは、わかっていた。しかし、私の想像したその困難のスケールは、帰国して飛行機を降りた文字通り第一歩の現実と比べれば、物の数ではなかった。娘のビクトリアと私は、ともにパスポート・チェックポイントで、税関と国境保護官から1時間もの検査を受けた。彼らはロシアのような特定の国からの旅行者を担当する専門家だった。

私は、娘と私の受けた待遇が、専門的で礼儀正しかったと初めに言っておこう。私は現在のこの時代の政治的な現実がどういうものか、ロシアに旅行したアメリカ市民を訊問しなければならないことはよくわかる。この2国の関係は、現在、記録的に冷え切っている。私の関心は訊問という行為でなく、質問の根底にある基本的な情報の内容である。このCBP係官が認めたところでは、彼は、2022年2月にウクライナに軍事作戦が始まって以来、数百人のロシア人と面談したという。彼がロシアについて持っていた想像は、特定の、プーチン大統領を調べねばならぬ、政治的疑いを持つ者の観点に基づいていた。そして彼らがロシアについて持っている物語は、この係官にとって、ありがたい福音書になっていた。ついでに言うと、それはアメリカ政府の調査全体に強い影響を与えている。なぜなら、こうした政治的被疑者のブリーフィングが、アメリカの情報社会を通じて、国家安全アナリストの用いる主たる情報源になっているからだ。

要するところ、私への尋問は急速に、一方で私自身と、他方で、アレクセイ・ナヴァリニー（Alexey Navalny は係官によると、ロシアの反体制派のほとんどが支持する、監禁されたロシア野党の人物）とウクライナ政府のコンビネーションになっていった。実質的に、私の主張するすべては直ちに、「親ロシア・プロパガンダ」ということになった。私は係官に、今日のロシアの現実を分らせようとした。特に、ウクライナでの軍事的運動に関する、ロシア政府への強い支持と、それへの根底にある批判について話した。しかし、結局最後には、私の議論と、彼らの基礎にある事実は、どんなに私が試みても、「クレムリンの論点」として包括された。私への尋問が終わったときに、新しく理解したことは、いかに、公的アメリカ政府の知的DNAの中に、ナヴァリニーとウクライナ物語が、深く食い込んでいるか、それを引き抜くことが、いかに困難かということであった。

私は多少の希望をもって可能性を信じた——私は、ロシア訪問と自分の体験について、主流メディアのある者たちと、責任あるやり方で、関わることができるだろう——そしてロシアに関する公的なアメリカ路線を、つき崩す突破口を作り出せないものか、考えた。そんなとき、私はある大手の地方新聞のコラムニストと接触し、私は彼にこちらから電話して、私の旅行の内容と調子を正確に伝えるような何かを、書いてみないかと探ってみた。

私はこの新聞やコラムニストの名は言わない。その理由は、記事が出るかどうか、その内容が現実にならぬか、わからないという単純な事実による。しかし私が確実に知っていることは、私がロシアにいたときに行ったインタビューの多くを、彼は知っており（それらはアメリカの社会メディアで公表された）、したがって関連した疑念を発する十分な理由があることだった。

しかし事は逆に、このコラムニストは、こうしたインタビューでの私の言葉を適当に選んで、現実のコンテキストなしに、私を親露派のサクラとして描こうとした。そこで私が押し返すと、彼は戦略として、古臭い過去の犯罪的な確信を、私と私の旅行に対して持ち出した。これが今日、アメリカのジャーナリズムと言われるものらしい。私は私の間違いであればうれしいが、これは私の最初のメディア論争ではない。私はこのゲームがどのようになされ、役者がどう振舞うかを知っている。悲しいことに、私が望みをかけていた、地方、地域、それに国家の主流メディアの、私への支持希望は、すべて叶わなかった。私は、私の旅行体験、洞察、それに分析が、正確な公平なやり方で拡散されることを願っていたが、それは間違いだったようだ。主流メディアは、今後も、何年もやってきた通りのことを続けるだろう——公的な物語を平気で口移しに報道し、それに挑戦する勇気ある者を誰でも一蹴するであろう。

帰国後、私はロシアにいる間できなかつた、Eメール・アカウントへのアクセスが可能になった。そこで直ちに出くわしたのは、私の尊敬する人々の間の、専門仲間の討論だった。彼らは同じような職業的背景と反戦的傾向を持っている。それは、ロシアと特にプーチンが、ウクライナの戦争を避けるために可能だった、これ以上の何か、あったかどうかの問題をめぐって起こっている。このグループのある者たちは、プーチンは行動するより仕方がなかったと主張し、他の者は、追求することのできる、戦争以外のオプションが常に存在すると議論している。

この討論で感じたことは、わずかの例外を除いて、根底にある分析がアメリカという観点からなされていることで、何がロシアでは政治的に可能なのか、または何が、論じられている問題の事実上の根底にあるのかを、ほとんど何も考えていないことだった。アメリカの見方で、ロシアの現実を判断することは、反物語を作り出すことで、それは根本的に欠陥があり、現実と間違いだった。プーチンは戦争を避けることもできたと論ずる者たちに

ついで言えば、その議論は、ロシアの現実あるいはこの場合の事実、全く根付いていない。

ロシアがどのように働くかの洞察がなければ、ロシアの振舞いについて勝手な期待が作り出され、それは相手がいないときには、人々の間で不安の種となり、プーチンや彼の政府の行動を想像する無責任な者たちが、反ロシア物語の全体をねつ造することになる。この討論からわかることは、この国について開かれた、好意的な考えを持つ者の間でさえ、ロシア嫌悪とロシアの現実全体への無知が、克服しがたい、偏った知的障害物を作り出すことである。……

私の仕事は私にとって切り開かれている。私は、帰国して直ちにぶつかった困難に怯んだとはいえ、私は自分が成功すると楽天的に考えている。私は、ロシア旅行中に私の得た印象の強さに、力と勇気が湧くのを感している。私はまた、社会メディアの世界に存在する私への支持に、勇気を与えられた。そこでは、公的な物語に敢然と立ち向かう思想が、自由に交換され、アメリカ人仲間のかかなり多くの精神と態度が、形成される可能性を見せている。

このロシア訪問と、ここから得られた啓発と目覚めを定義するテーマは——「平和を戦う」Waging Peace である。このテーマの根底にあるのは、そこから見えてきた行程が、イデオロギー的な性質の、避けられない戦闘を巻き込むことである。勝つためには、この運動に携わる人々が、政府に援助された主流メディア物語に対抗するための、事実を根拠とする議論のすべてを、奮い立たせなければならない。この種の活動は、真空の中では起こりえない。それは、あの昔からの格言「汝の敵を知れ」に根付いていなければならない。

私はこの闘争の初期に、敵と直面することになったという事実、力を与えられたと感している。

ロシア恐怖症（憎悪）に対する戦争は、決して生易しいものではない。しかし、アメリカとロシアと世界の残りの将来のために、この戦争は勝利しなければならない。「平和を戦う」という大義は偶然のものでなく、生死を賭けた闘争である。

我々は勝つ——敗北のオプションがないという理由からだけでも。

[訳者 Greatchain 注]

メディアの方々には、ぜひ読んでいただきたい論文だが、特に、この最後の締めくくりをよく理解していただきたい。

我々は勝つしかないから勝つのである。私は何度もこれを繰り返している。

アメリカは、敗北のオプションしか持たないから負け、ロシアは勝利のオプションしか持たないから勝つ。その「ロシア」の部分に「我々」がつながってくる。更にこれを説明すれば、我々——我々正常な者たち——にとって、今の世界の状態では、アメリカという選択肢はなく、ロシアという選択肢しかない。だからロシアを応援しているにすぎない。これは強制された二者択一で、どうにもならないことである。

スコット・リッターのこの論文は、アメリカ人を頭に置いて論じているが、日本人もそこへ組み込まれる。しかし我々日本人には特別の問題として、赤面を覚えるある個所がある。強調した部分（3頁）を読んでいただきたい。我々（我々の政府とメディア全体）は、ロシアのウクライナへの侵攻を、こういうものとして考えなかった。我々は、何ひとつロシアの事情を考えることなく、いきなりロシアを悪として糾弾し、自ら進んでアメリカに加担した。そしてこれが今現在も続いている。これが世界から見て異常であることが、ここに引用した文からわかるであろう。